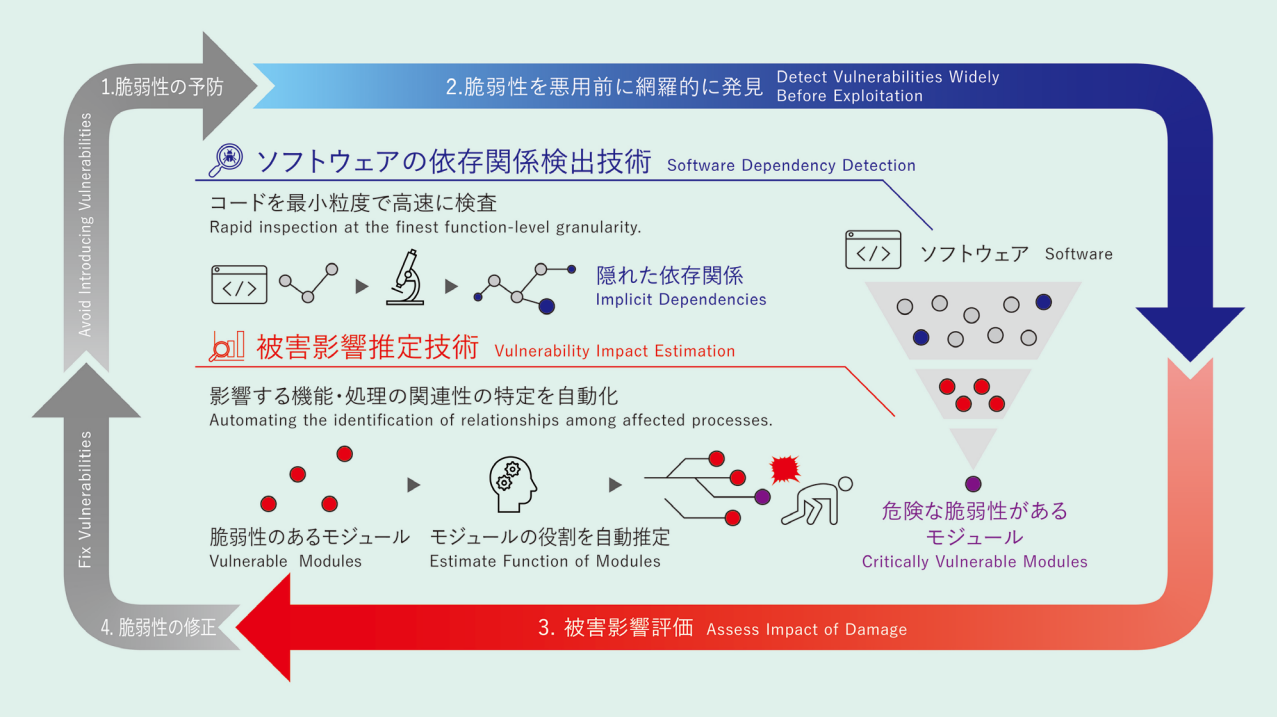
ソフトウェアの開発・運用時の第三者パッケージ起因のセキュリティリスクを低減します

脆弱性リスク低減技術

背 景 – 技術課題

現在のソフトウェアやシステムの大半は、既存のOSSや外部ライブラリなどの「再利用コード」（他者が開発したコードを取り込んで利用するもの）で構成されています。これにより開発効率は向上していますが、一方で、把握できていない再利用コードの存在が脆弱性混入のリスク、ひいては、セキュリティ事故の拡大リスクを高めています。



研 究 目 標 – 成果

把握できていない再利用コードを検出し、脆弱性混入のリスクを低減します。また、脆弱性が悪用された場合の被害影響を推定し、対策の優先度を判断します。

技 術 ポ イ ン ト

01 要素技術

- 依存関係検出技術は、把握できていない再利用コードを高速かつ高精度に検出し、リスクの見える化を実現
- 被害影響推定技術は、脆弱性の影響を受ける機能を特定し、被害影響を評価

02 市中技術差異点

- 依存関係検出技術は、総当たり比較を効率化し誤検知を低減、把握できていない再利用コードを高精度に検出可能
- 被害影響推定技術は、脆弱性の機能影響と被害推定を自動化し、安全評価の信頼性と迅速性で既存技術を凌駕

利用シーン	マルチインダストリー（開発・保守／監査／品質保証）	**R&Dフェーズ**	研究
技術確立予定時期	FY25–26	**ビジネス化予定時期**	FY27–29

【出展企業】
NTT株式会社 社会情報研究所

【問い合わせ先】
社会情報理論研究プロジェクト

【共同出展社/社外連携先】
–

【関連Link】
–